

# 入善町道市地区における浄土真宗の講組織の構造と維持要因： 地区の社会構造に着目して

卯田卓矢・益田理広・金 錦  
細谷美紀・久保倫子・松井圭介

キーワード：浄土真宗，講組織，社会構造，維持要因，入善町道市地区

## I 序論

### I-1 研究課題

北陸地方は「真宗王国」とも称されるように浄土真宗（以下、真宗）の篤信地帯として知られている（青雲，1974）。当地方では1471（文明3）年に本願寺第八代宗主蓮如が越前吉崎（現福井県あわら市）に居を構えてから教団の急速な成長がみられ、その教線は北陸のみならず、関東や奥州にまで及んだ。蓮如の布教によって真宗へ転宗した寺院も数多く見られ、これらの地方では現在でも真宗寺院（主に大谷派、本願寺派）の割合が高い。

真宗は「講」を基盤とした集団活動を通して教線を拡大させたといわれる（笠原，1942）。北陸においても小地域単位での講中（小寄講）の組織化、また教義を平易に説いた「消息」<sup>1)</sup>が信仰を拡大、あるいは持続させていく上で大きな役割を果たした。

この地方に見られる真宗の講の形態は二種に大別される。すなわち、寺を講会の場所として営まれる「寺御講」と、村の民家や道場をその場所とする「村御講」である。このうち、寺御講は所属を同じくする門徒が手次寺（檀那寺）に集まり営まれるもので、一村を越えた形態となる。一方、村御講は、村落としての性格が強く、しばしば宗

派を越えた者が民家や道場に集まり講を行う形態をとる（内藤，1978）<sup>2)</sup>。

他方で、講のような信仰集団は、精神的な結びつきを生むだけでなく、村落の社会構造を反映し、さらに村落社会の秩序や成員相互の紐帯を維持・強化する機能も有している。日本の講組織を体系的に検討した桜井（1962：57）は、その構成員間の結びつきを「階層的同族的部落共同的」であると指摘している。

こうした村落の構造を反映する信仰集団の研究は、地理学、社会学、民俗学、文化人類学などの分野において行われてきた。地理学においては、山口（1964）が会津地方の調査を基に、集落が肥大するに伴い、それに内包される小集団が地縁によって結合する際にこの種の信仰集団が重要な役割を有していることを指摘している。平井（1980）は丹波高地東部を対象に、「カブ」と呼ばれる同族集団と宮座組織が密接に結びついていること、さらに「カブ」は宮座組織の機能変化にも影響を及ぼしていることを解明した。近年では中條（2001）が島根県仁多郡の集落を事例に、階層や社会集団との関係に着目して、高度経済成長期以降の講組織の機能や性格の変化について検討している。

以上の研究にみられるように、信仰集団の構造

やその維持、変容を明らかにするためには、それらと村落の社会構造との関係に着目して考察することが重要となる。そこで、本研究では富山県下新川郡入善町道市地区を事例に、真宗の講組織の構造とその維持要因を、地区の社会構造を通してから明らかにすることを目的とする。

## Ⅰ-2 研究方法

真宗の講組織は、庚申講や山の神講、水神講といった他の信仰的講と同様に、村落社会と構造的に結びついていることが指摘されている（森岡，1978；松崎，1985；本林，1989）。その中で、富山県下の真宗の講を詳細に検討した宇治（1996）は、村落の社会構造が寺御講や村御講の基盤となり、かつ講組織の維持にも深く関係すると述べている。また、宇治は村落構造を分析する視点として、集落内の階層性や血縁関係、社会組織などに着目している。本研究ではこの視点を踏まえ、道市地区の血縁・同族関係、社会組織との関係から、講組織の構造と維持要因について明らかにする。

一方で、本研究で対象とする真宗の村落は、従来、「弥陀一仏」の絶対他力という真宗の信仰的性格から、地域の固有の習俗を破壊する反民俗性が強く、民俗信仰の空白地帯とされてきたため、民俗学を中心に研究対象地域として忌避する傾向が長く続いた。しかし、近年ではこのような理解が改められ、報恩講・蓮如忌などの真宗行事や巡行仏、葬送墓制といった事象を対象に「真宗と民俗」との関係进行分析した研究が蓄積されるようになった（松崎，1985；蒲池，1993・2001；西山，1998）。

地理学において真宗を扱った研究は、寺院の分布傾向（内田，1959）、集落景観の特性（内田，1966・1971；中川，1983）、道場と社会集団との関係を論じた研究（藤村，2004）等が存在するものの、講と村落との関係を考察した研究はほとんどみられない。そのため、講組織と村落の社会構造との関係について考察を行う本研究は、真宗を扱った地理学的研究として意義があるものと考えられる。

以下、本研究の手順について述べておく。Ⅰ-3では本研究の対象地域である道市地区について概観する。Ⅱでは真宗の北陸布教、及び入善町における真宗寺院と講について説明する。Ⅲでは、まず道市住民の手次寺と門徒の関係を述べ、次に講組織の仕組みと現在の活動状況を述べる。Ⅳでは地区の社会構造について検討する。具体的には血縁・同族的性格を有する班の社会組織、及び地区を単位とする社会組織について述べる。Ⅴでは以上を踏まえ、講組織の構造とその維持要因について考察を行う。

調査方法は、文献資料の分析と住民への聞き取りによった。この聞き取り調査は、2012年9月10日から15日にかけて実施したものである。

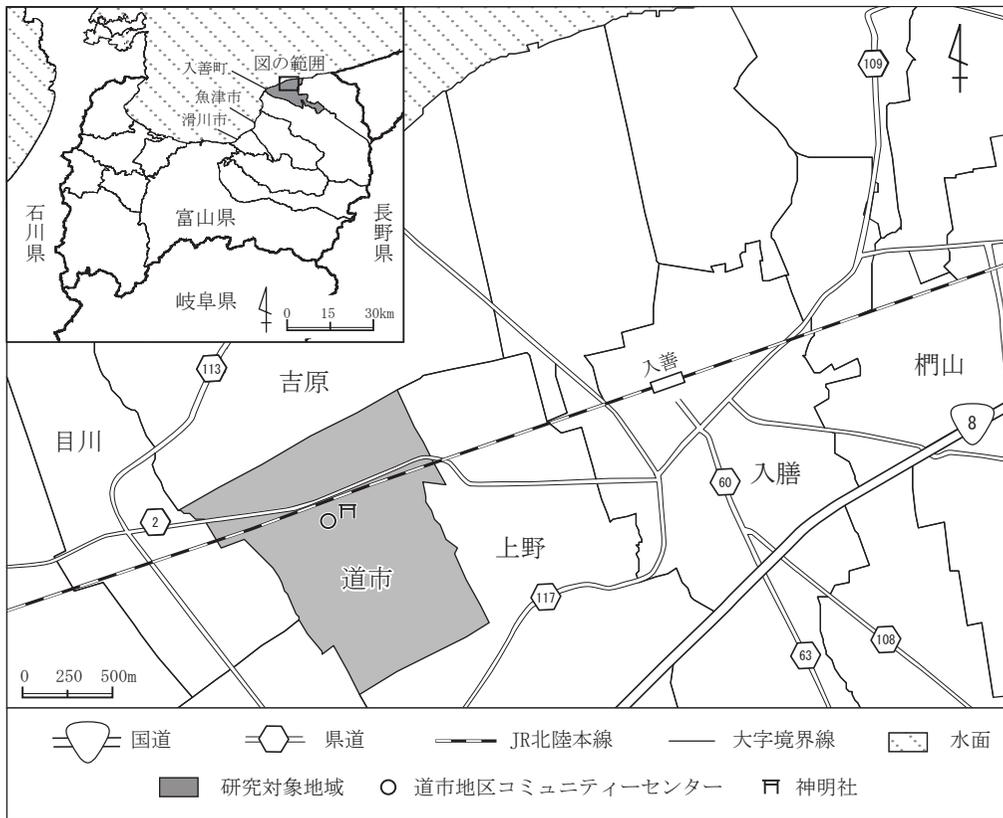
## Ⅰ-3 研究対象地域

下新川郡入善町は黒部川扇状地の東部、黒東平野の中心部に位置する。同町は1953年10月に上原村、飯野村、青木村、小摺戸村などが合併し、更に、1959年1月には舟見町と旧朝日町野中が編入によって現在に至る（入善町史編さん室編，1990）。なお、2012年9月現在の人口は26,852人である。

本研究の対象地域となる入善町道市地区は、入善駅（JR北陸本線）がある市街地の入膳地区から1kmほど西にある集落であり、63戸と241人の人口を擁している（第1図）。また、行政区域としては、1879（明治12）年1月時点では柵山、吉原、目川などを含む下新川郡入膳村に属しており、その後は1899（明治22）年の市町村制から上記の入善町誕生まで、上野、吉原とともに上原村に属していた（入善町誌編纂委員会編，1967）。

### 1) 道市地区における人口及び世帯の特性

次に、本地区の居住者の特徴を確認する。第1表は道市地区の就業形態及び戸数と人口の変遷を示したものである。まず戸数と人口をみると、1980年の66戸・325人から2010年の64戸・274人へと緩慢な減少が認められるに過ぎず、ほとんど変動はないといってよい。これは、本地区は市街地である入膳地区に近接しているものの、入膳地区



第1図 研究対象地域図

や黒部市などへの通勤者に向けたマンションやアパート、新興住宅地の建設などが行われなかったためであると考えられる。また、聞き取り調査においても、ここ50年の間に当地区へ転入したのは

2世帯のみであり、そのために他地区と比較しても地区としてよく纏まっているという意見が聞かれた。

次に、入善町及び道市地区の人口比率を年齢別に示す(第2図)。道市地区では65歳以上の高齢

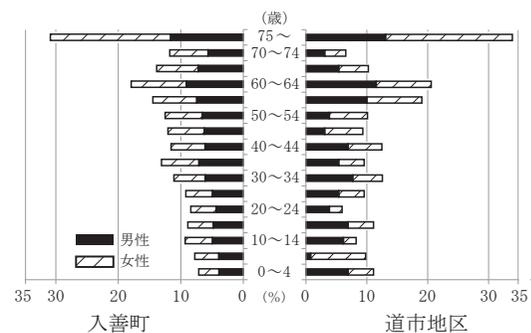
第1表 道市地区における就業形態の変遷

年	農家数				農業 就業 人口 (人)	戸数 (戸)	人口 (人)
	専業 農家 (%)	第1種 兼業 農家 (%)	第2種 兼業 農家 (%)	小計 (戸)			
1970	9	58	33	60	130	—	—
1980	0	16	84	56	73	66	325
1990	4	2	94	50	60	67	328
2000	2	10	88	40	66	63	280
2010	0	8	92	26	26	64	270

注1) 1990年以降の総農家数は販売農家、それ以前は全ての農家を表す。

注2) 「-」は不明を意味する。

(農業センサスおよび住民基本台帳より作成)



第2図 入善町及び道市地区の年齢別人口構成(2010年)

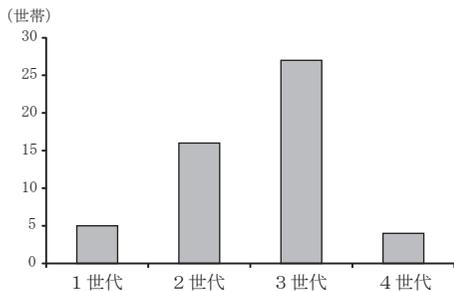
(国勢調査より作成)

者が全体の25%を占めるものの、20歳未満の人口は20%と少なくない。他方、入善町では前者が29%、後者が16.5%と少子高齢化の傾向がより顕著である。ここで高齢者を含む世帯に注目してみると（第3図）、高齢者が単独もしくは夫婦のみで居住している世帯は5戸と少なく、三代目以上で居住する世帯が31戸と半数を占めている。このように少子高齢化が比較的緩慢であり、世帯構成員が多いことが当地区の特徴といえる。

就農形態については、先の第1表に見られるように、農家数、農業就業人口ともに減少傾向にある。加えて、農家数を分類別にみても、専業農家は皆無であり、第1種兼業農家も8%に留まっている。このことから、当地区における兼業化あるいは離農化の実態が見て取れる。そのため、若年代では、入善町や黒部市の企業で就業するのが主となっている。

## 2) 道市地区における社会組織、信仰組織の概要

ここでは本地区に存在する社会組織について概説する。道市地区の社会組織は地区を単位とする自治会及び各種団体と、地区の下部組織である班を単位とする組織から構成される（第4図）。信仰組織は氏子と門徒の両組織が存在する。

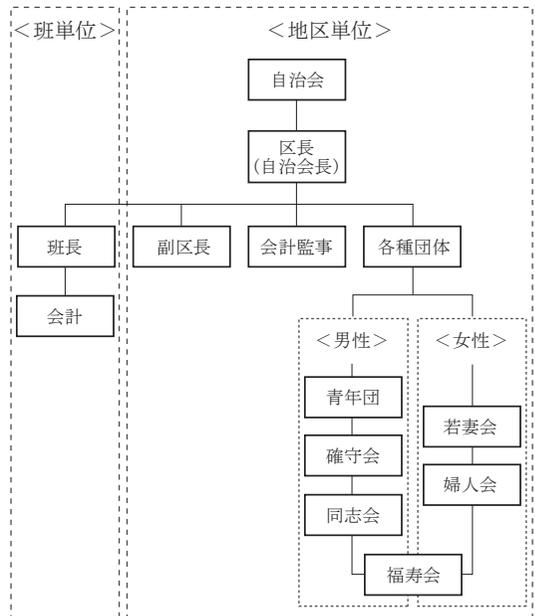


第3図 道市地区における高齢者を含む世帯の構成 (2012年)

注1) 高齢者とは65歳以上の世帯員を指し、本図において計上した世帯はこれに該当する者を含むものに限る。

注2) 「1世代」は単身もしくは夫婦による世帯構成を指し、「2世代」はそれにその親もしくは子が加わるものである。「3世代」、「4世代」についても同様である。

(住民基本台帳より作成)



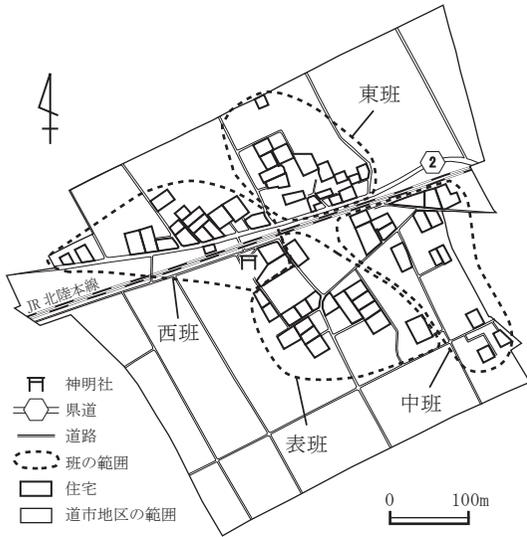
第4図 道市地区における社会組織

(聞き取り調査より作成)

そのうち、自治会は区長（自治会長）、副区長、会計監事、各班から選出される班長・会計（各1名）からなる。各種団体は年齢階梯の性格を有しており、年齢を増すごとに男性では青年団、かくしゅ確守会、同志会、女性では若妻会、婦人会へと移行し、60歳以上になると男女共に福寿会に加入する。

また、道市地区では地区の下部組織として4つの「班」（「方」ともいう）が存在し、中央を横切るJR北陸本線を挟み、北側に「西班」と「東班」、南側に「表班」と「中班（中坪）」に分かれている（第5図）。各班はほぼ均等に戸数が配分されており、この班が住民の社会組織の最小単位となっている。

次に本地区の信仰組織について述べる。本地区には氏神を進行する氏子組織と真宗門徒を中心とする門徒組織が存在する。氏子の属する神社（神明社）は地区のほぼ中央に位置している。社殿は北陸線敷設に伴い約100年前に現在地へ移築されたものである。氏子には地区の全戸が加入する。この集団の活動には年間の主な祭礼である2月の火祭り<sup>3)</sup>、3月の春祭り、6月の虫祭り（除蝗祭）、



第5図 道市地区における班の範囲（2012年）  
（聞き取り調査より作成）

10月の秋祭り（収穫祭）等があるほか、祭りごとに世帯の1人が代表して宮掃除を行う。

氏子の代表である宮総代については各班から1名選ばれ、さらにその中から宮総代を統括する総総代（総宮総代）が選出される。宮総代は全戸持ち回りで任期は4年、総総代は1年である。ただし、15年ほど前までは特定の家系が10年以上に渡って宮総代を務めていたという。宮総代は宮司への連絡や祭りで用いる供物の準備、宮掃除などを担当する。なお、この神明社にて神事を行う宮司は本来黒部市生地地区の新治神社の宮司であり、道市地区で行事が催される際にそこから派遣される。

次に門徒組織について見ると、道市地区では住民のほとんどが真宗門徒であり、主に大谷派の光誓寺、持専寺、本願寺派の光明寺、善称寺、浄蓮寺を手次寺とする。これらの寺院はいずれも道市地区内ではなく、近隣の吉原や上野、東狐地区に所在する。講組織は寺御講、村御講、報恩講の各形態が存在し、そのうち、門徒の自宅で勤行を行う村御講は毎月大谷派と本願寺派の門徒が合同で営む。

この村御講の形態は各地区によって多様であ

り、詳細は後述するが道市のように大谷派と本願寺派が合同で行う地区のほか、大谷派あるいは本願寺派が別々に行うもの、両派の住職が交互に担当する地区などが見られる。当地方の講組織の実態を調査した奥田（2006）によれば、門徒の就業形態の変化や住職の兼業化などから近年閉講するところも少なくないと言われるなか、道市地区では真宗の行事が現在でも継続的に行われているという。

## II 北陸地方の浄土真宗

本章では講組織の歴史的背景について理解するため、真宗の北陸布教、及び入善町における真宗寺院と講について概説する。

### II-1 北陸布教の歴史的展開

#### 1) 綽如、蓮如による布教

「真宗王国」との異名を持つ北陸地方は真宗の卓越する地として有名であるが、その本格的な布教は本願寺第五代宗主綽如（1350-1393年）にまで遡ることができる。1390（明德元）年、綽如は明の国書判読の功から井波（現富山県南砺市）の瑞泉寺の建立を許され、同寺を拠点に北陸一帯での布教を試みた。当地では既に時宗が広まっていたが、綽如はこれを真宗と同じ浄土教の一派として扱い、受容の基礎として利用することで教化を推し進めた（土井・金龍編、1991）。

彼の没した後も六代巧如（1376-1440年）とその次男如乗により熱心な布教が続けられたが、現在に至る真宗の繁栄は「真宗中興の祖」とも称えられる八代蓮如（1415-1499年）の存在によるころが大きい。蓮如は天台宗との対立による諸国巡錫の中で、朝倉氏の圧政に苦しむ越前吉崎の僧経覚にその才を買われ、当地に草庵を結んだことを契機に北陸布教を本格的に進めた。

1471年から75年までの吉崎滞留中、蓮如は真宗教義を平易に説いた消息を信徒に送り、また「正信偈」や「三帖和讃」といった聖典を出版することで教線の拡大に力を注いでいる。そしてその結

果、1473年には彼の下に加賀、能登、越中はもとより、信濃、出羽、奥州といった遠国からも参詣者が集まり、「多屋と号して薨を並べて家を造る」ほどの崇敬を得たという。その盛況は蓮如自身が「男女老少幾千万となく当山へ群衆せしむる」と記すほどのものであった（土井・金龍編、1991）。

## 2) 一向一揆と講の発展

北陸地方の真宗の普及において、その力を象徴する出来事として知られるのが1488（長享2）年の加賀一向一揆である。この一揆により守護富樫政親は自刃を強要され、加賀は以後90年に渡り「門徒持ち」の国と化してしまう。

この一揆の背景には強力な門徒組織である「講」の発達がある。真宗の講は元来「惣」と呼ばれた農民自治組織が真宗と結びつくことによって生まれたものと考えられている（千葉、1961）。そもそも荘園支配に反目した惣と天台・真言両宗と対立する真宗信徒の集団は互いに反権力的な性格を有していたが、惣の成員が蓮如の布教によって信徒集団と結合し、「講」となった（ただし名称としては「惣」「惣中」「講」が併存）。この講は真宗の伝統として定期的に集まって互いの信仰を確認し合い、本山への寄付を募ったが、信仰の礎となる往生の確信と惣の経済力の結束は一揆を準備するものとして十分であった。

北陸地方における講の出現は極めて古く、蓮如の頃よりその名を確認することができる。なかでも最初期のものが五箇山（現南砺市）の「十日講」である。この十日講は五箇山衆が瑞泉寺の下に結成したもので、石山本願寺に対して毎年糸や絹を進上している（奥田、2006）。また、当時の寺院と道場の別も講（または惣）が捻出できる寄付金の額で決められていた<sup>4)</sup>。その後も講は時代を経るごとに様々な名称を得、各地に無数に結成されていった。

## 3) 本願寺の東西分裂と江戸幕府による宗教統制

このように蓮如以降の北陸の真宗寺院は人的にも経済的にも次第に権勢を誇る存在となった。

しかし、1600（慶長5）年頃より発生した教如（1558-1614年）と弟准如（1577-1631年）の間の宗主を巡る争い（本願寺東西分裂）は北陸真宗にも多大な混乱を生じさせ、特に僧正宗（黒部市生地・専念寺）、信蔵（入善町青木・浄慶寺）の処刑に始まる教如派への弾圧によって東西の溝は深まった。また、1647（正保4）年の瑞泉寺東派帰参では243の寺院が転派に従い、相対する西派も僧階昇進、寺号・五尊下付などで末寺獲得を試みるなど、東西本願寺の勢力争いは熾烈を極めた（土井・金龍編、1991）。

他方で、江戸幕府は1640（寛永17）年にキリシタン弾圧に伴う宗門改めを実施し、1671（寛文11）年に宗門人別帳による寺院所属を義務化した。真宗を含め各宗の寺院はこれ以降、檀家制度のもとで安定した寺院運営を行うことが可能となり、本堂修繕や境内整備を進めた。また、このような近世の寺檀制度は、葬式・年忌法事・追善供養をその主内容として祖先崇拜と仏教の結合を庶民の間に普及させ、檀家にとって寺は祖先の祭り場、寺僧はその祭司という性格を濃厚にさせることになった（竹田、1957）。

## II-2 入善町の真宗寺院と講

### 1) 入善町の真宗

前節で述べたように、真宗の北陸布教は第五代緯如の時代に始まった。入善町への真宗の流入もその頃とされ、吉原地区の光明寺と桐山地区の常福寺の二寺が最古の真宗寺院であると伝えられる（寺伝によれば光明寺は1390年、常福寺は1392年創建）。しかし、その伝承の根拠となる本尊の裏書には改ざんの痕跡が確認できることから、確実に布教が行われたのは蓮如の時代よりもさらに後年になるという。また、入善町はかつて長尾氏の支配下にあり、一向宗禁教が敷かれていたため、真宗寺院の発展が阻害されたと考えられている（入善町史編さん室編、1990）。

とはいえ、現在の入善町は「真宗王国」の一部に相応しく、町内の仏教寺院35か寺のうち、真宗寺院が33を数えるほどに真宗が卓越する地域であ

り、近世の東西分派の後に急速に広まりを見せたことが推察される。現に先にも触れた教如派の殉教者信蔵も当町の僧侶であり、当時既に篤信の徒が得られていたと理解できる。

当町における宗派別の真宗寺院数は大谷派が22、本願寺派が11と大谷派寺院が多い。隣接の黒部市や朝日町も同様で、朝日町のように大谷派が町全体の9割を占めているところもある。県全体での大谷派、本願寺派の比率がほぼ均等であることからすると、旧下新川郡が大谷派の勢力圏にあることが分かる（入善町史編さん室編、1990）。

## 2) 入善町における講の発展

講とは元々經典の講釈を意味するもので7世紀頃より存在したが、時代とともに意味が拡大し、「頼母子講、無尽講」のような民間の互助的な金融組織の名としても使用されるようになった。真宗においては宗祖親鸞を追慕する報恩講が起源とされるが、蓮如の時代以降、在来の農民自治組織「惣」と結びつき、強力な集団組織へと成長していった。

しかし、入善町を含む黒東地方に講が結成されるには教如、准如の本願寺分裂の頃以降となる。それは上述したように、この地方は長尾氏による一向宗禁教を受け続けていたからである。禁教が解かれると当地でも布教が進むが、東西分裂の中で信心を得たのは先の正宗、信蔵の存在から大谷派の教如であった。それに対し、准如は1608（慶長13）年頃に上野村（現上野地区）の「廿五日講」に消息を与えている。これが黒東地方において確認できる最古の講であり、当地での本願寺派拡大の先鋒として消息を下付されたといわれている。また、朝日町山崎地区の真浄寺には教如の消息が残されており、黒部川東部には2つの講が存在したとされている。入善町についても、青木地区の浄慶寺に教如の時代の消息があり、少なくとも江戸初期以降には講の存在が認められる（奥田、2006）。

その後、当町近辺では1811（文化8）年に奉修される親鸞聖人五百五十回大遠忌法要の際、本願

寺御影堂の修復費用を捻出するために、計14の講組織が結成される。これらの講は1812年に永続と効率化のため、講名を「<sup>ひかわこう</sup>椴皮講」として一つに集約された（富山別院開創百周年記念出版『越中念仏者の歩み』編集委員会編、1984）。当時、この椴皮講の年番役には吉原の光明寺を含む5つの寺院が任命されている。現在では椴皮講そのものは活動を停止しているが、そのうちの「七日講」（「椴皮講之内七日講」）は未だ活発に行われており、講員数約1,700を誇る県内でも最有力の講組織の一つである。この七日講は春と秋に営まれる本山御助成法座において上納金を本山・別院等に納める機能を保持している。ただし、現在では講員も減少しており、上納金の額も年々縮小されつつある（奥田、2006）。

この本山御助成のうち、秋のものは「ゴエイサマ（御影様）迎え」への寄付金も募っている。ゴエイサマ迎えは、講員の居住する地区に宗主を描いた巻物（影像）や消息文が巡って法座を営むもので、当地方では大谷派及び本願寺派共に行われている。かつては吉原地区にて合流し露店も集まり賑やかだったというが、現在では両派の諍い（同地区に同時に巡回したことによる）から、本願寺派が一か月時期を遅らせて法座を行っている。

最後に当町での村御講について述べておく。村御講では勤行のあとに共同飲食を行うなど、社交場としての性格も有している（富山県下新川郡役所編、1909）。そのため、宗派の別なく営まれることも多々認められるが、他方でその形態は各地区において差異がみられる。例えば、本願寺派と大谷派の合同で営む道市のほか、隣接する木根や青木、東狐地区では大谷派門徒のみで行う。また、下飯野新では地区に大谷派の門徒がいなくても関わらず、現在でも大谷派と本願寺派の住職が交互に担当するという形態をとっている。以上が研究対象地域における講組織に関する歴史の概要である。これを踏まえて、次章では道市地区における真宗の講について説明を加える。

### Ⅲ 道市地区における真宗の講組織

#### Ⅲ-1 手次寺と門徒の分布

道市地区では主に大谷派の光誓寺、持専寺、本願寺派の光明寺、善称寺、浄蓮寺の門徒が存在する。そこで本節では手次寺と門徒との関係について、両派について対等に述べるために大谷派の光誓寺、本願寺派の善称寺を例として検討する。

##### 1) 大谷派・光誓寺

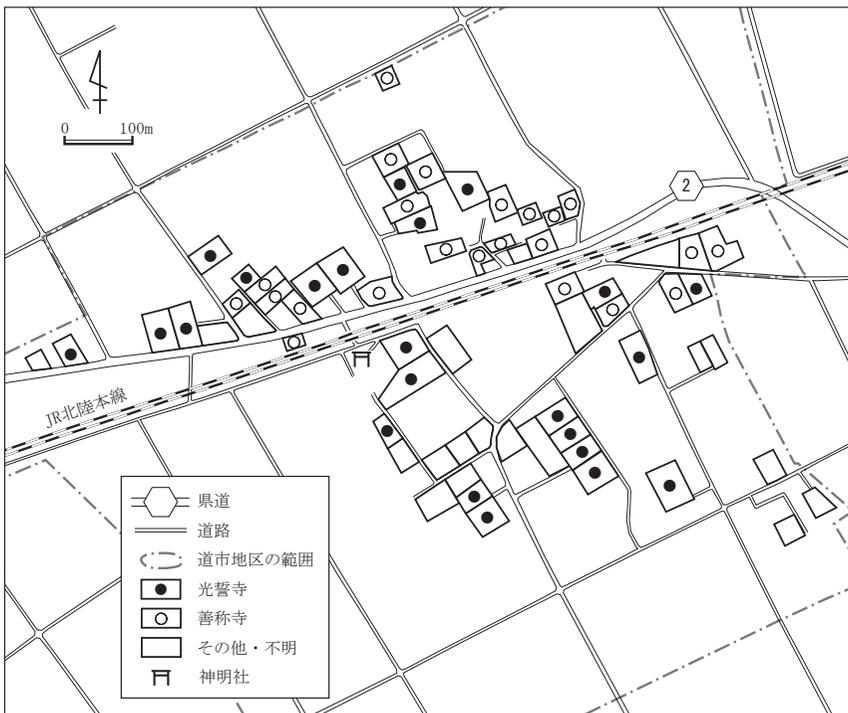
まず大谷派の光誓寺について記述する。道市地区における光誓寺の門徒数は聞き取り調査によると23戸である(第6図)。当寺の門徒は道市のほか、吉原、木根、芦崎、浦山新地区など黒部川扇状地一帯に点在しており(第7図)、門徒総数は130戸余となる。光誓寺は元々真言宗に属していたが、第十世住職顕誓が教如の「法弟」となったことで転宗したとされている(入善町誌編纂委員会編、1967)。なお、当寺に限らず舟見地区などの山沿

いの集落では、真言宗から真宗へ転宗する寺院が少なくなかったといわれている。

また、道市地区の光誓寺門徒は5～6戸からなる3つの「組」に分かれて寺の行事にあたっている(第8図)。各組からは役員(門徒総代)が1名選出され、寺からの法要等の連絡が門徒総代を通して各戸の門徒に伝達される。門徒総代は連絡係のほかに、葬儀や法事、月2回営まれる寺御講への参加などの役割がある。

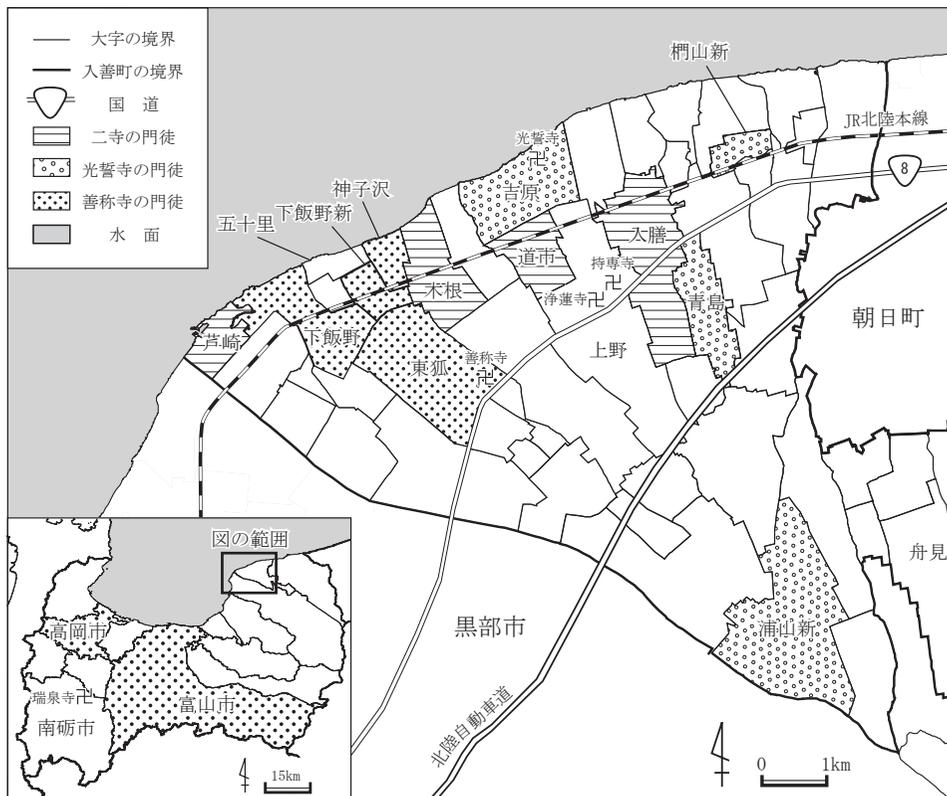
更に、これら門徒総代を統括する役員として、門徒総代長が3名任命されることになっており、現在は道市地区から2名、木根地区から1名が選出され、その役割を務めている。このうち、道市地区の2名は自らの家系から3代に渡って門徒総代長の役職を引き受けている。

なお、光誓寺の年間行事は、次節で述べる寺御講や報恩講(10月)のほかに、修正会(1月1日)、永代祠堂経法要(7月20～22日)、えいたい し どうきょう 暁天講座(7月28日)、ぎょうてん 歓喜会(8月14～16日)等がある。



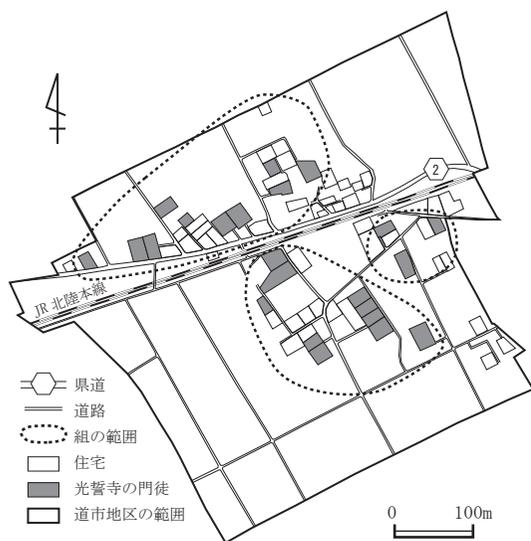
第6図 道市地区における善称寺および光誓寺の門徒の分布(2012年)

(聞き取り調査より作成)



第7図 善称寺と光誓寺の門徒と手次寺の分布（2012年）

注) 富山市及び高山市については、市内に門徒が存在するものの、門徒の居住する大字は特定できなかった。（聞き取り調査より作成）



第8図 道市地区における光誓寺門徒の組の範囲（2012年）

（聞き取り調査より作成）

## 2) 本願寺派・善称寺

次に本願寺派の善称寺について述べる。当寺の創建は1429年と伝えられ、元は上新川郡高月（現滑川市）にあったが、黒部川の洪水により1758（宝暦8）年に現在地である東狐地区に移ったとされる。この寺院は道市地区においても、23戸、更には芦崎、下飯野、下飯野新、東狐の各地区、ひいては富山市内に至るまでの広範囲に渡って多数の門徒を擁しており、その総数は500戸を超える（第6図、第7図）。

当寺の門徒総代は寺則によると7名選ばれることになっており、そのうち2名が責任総代となる。門徒総代の任期は4年であり、選出方法は地区による互選だが、3～4期ほど担当するのが慣例である。総代は寺御講や報恩講などの各行事に参加し、帳簿付けなどの窓口的な役割を担う。

また、先述の光誓寺との相違点として善称寺門徒は地区を分割した「組」を有していないことが挙げられる。そのため寺からの連絡は地区で決められた連絡員が担当し、各門徒に伝達されることとなる。

第2表に善称寺の年間行事を示す。その内特に重要なものが各本山で営まれる御正忌報恩講であり、これは1月に奉修される。また、善称寺では門徒の既婚女性による仏教婦人会の活動が活発であるという特徴がある。この会の設立は1960年と古く、現在の会員数は500名に上る。会では毎月16日の寺御講後に定例会が行われるほか、報恩講や各種行事に際してまかないの準備や接客、正信偈の練習、旧跡参拝、福祉施設訪問など幅広い活動を行っている（善称寺仏教婦人会、2010）。一方、光誓寺ではこのような婦人会の活動は見られない。

### Ⅲ-2 真宗における講組織の仕組みと活動

本節では道市地区において現在も存続している講組織の仕組みと活動実態について検討するため、報恩講、寺御講、村御講、「ゴエイサマ（御影様）迎え」について概説する。

#### 1) 報恩講

宗祖親鸞への報恩謝徳のために営まれる報恩講は、真宗で最も重要な行事の一つである。報恩講

第2表 善称寺の年間行事（2012年）

月	日	行事名
1	1, 2 15~16	修正会 御正忌報恩講
3	— 21	総代会 入学児童お祝いの会
5	21	ご誕生法要
7	11~16	永代祠堂経法要
8	3 15~16	暁天講座 歓喜会(お盆)法要
10	24~25	報恩講法要
11	18 31	仏教婦人会総会 除夜会

注)「—」は不明を意味する。

(善称寺資料より作成)

は各宗派・本山によって日程が異なり、大谷派の光誓寺では10月18~19日、本願寺派の善称寺では10月24~25日に法要が営まれる。法要では門徒は手次寺に集い、その後、住職が門徒各戸を訪問し勤行を行う。

道市地区の手次寺のうち、大谷派の光誓寺では前日の午後に近隣の吉原地区の門徒8名ほどが「お斎」（食事）の準備を担当し、当日は道市地区と木根地区から2~3名が手伝いを行う。法要には光誓寺の門徒（主に戸主）に加え、別の手次寺の門徒も参加し、約300名が集まる。道市地区の住民は報恩講などの行事に対して積極的に参加する者が多く、一戸から戸主とその配偶者など2名以上が参加することも少なくないという。報恩講に参加できない場合には、後日改めて寺を訪れる住民もいる。

本願寺派の善称寺においても道市地区を含め門徒（主に戸主）の多くが参加し、毎年約400名が集まる。「お斎」の準備は、光誓寺と同様に近隣の門徒6名ほどが担当する。

また、上記のように法要後には両派それぞれの住職が門徒各戸を訪問して勤行を行うが、その順路は本家宅、分家宅の順に回ることになっている。かつては本家宅へ一族が集まり、そこへ住職を招いて勤行が行われていた。

#### 2) 寺御講

寺御講は手次寺に門徒が集まり講を営むものである。大谷派・光誓寺の寺御講は、大谷派前門主の命日の13日と親鸞の命日（旧暦）である28日の月2回営まれ、道市、下飯野、上野、吉原といった各地区の光誓寺門徒が参加する。ただし、田植えや稲刈りなどの農繁期には見送られる。

寺御講での食事の準備や接客などの当番は各地区が月ごとに担当する。そのうち、道市地区では地区内の3つの「組」の中からその年に当番となる1組が講当番として準備を行う。講では読経、法話の後に精進料理（油揚げ、大根、ニンジン、ゴボウなど）が振る舞われる。聞き取り調査によると、上記のように寺御講は月2回営まれるが、

道市地区では毎回半数ほどの門徒（戸主またはその配偶者）が参加するという。

一方、本願寺派・善称寺では、毎月1回、親鸞の命日（新暦）に当たる16日に講が営まれており、「十六日講」とも呼ばれる。講は各地区の善称寺門徒が参加して行われるが、門徒が存在しない地区でも講当番が割り振られている（第3表、第7図）。住職への聞き取り調査によると、これは以前門徒が当地区にいた名残だという。講当番は光誓寺と同様に、月ごとに担当地区が決められており、各地区の門徒が食事などを準備する。道市地区では現在男性3名ほどが寺御講の当番担当しているという。

### 3) 村御講

地区の村御講は、大谷派と本願寺派の両門徒が合同で営んでおり毎月20日前後に行われる。村御講では「オコブツサマ」と呼ばれる村御講用の阿弥陀仏（高さ50cm、奥行き20cmほど）が用いられており、保管されている地区のコミュニティセンター（公民館から改称）から講の際に村御講の会場となる住宅に運ばれる<sup>5)</sup>。

道市地区では大谷派・光誓寺の住職が代々村御講のお勤めを担当している。そのため、読経に用いられる「正信偈」は大谷派の形式となる。ただし、オコブツサマへの飾りつけやおケソクと呼ばれる供物（団子）は宗派による差異はみられないとい

う。なお、住民は村御講で勤行を担当する寺を「オコデラサン」、住職を「オコボウサン」と呼ぶ。

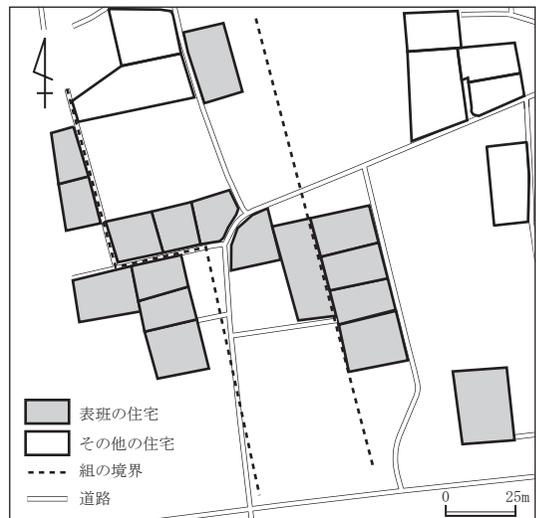
道市地区の村御講は「十九日講」とも呼ばれる。これは、地区が不作に見舞われた時に、西班牙の大地主であった光誓寺門徒のA家が地区を代表して阿弥陀仏を預ける代わりに、翌年に2年分の年貢を納めるとの交渉を行ったのが19日だったことによる。このA家との関係から、当地区の村御講は光誓寺の住職が勤行を担当していると推察される。

村御講の会場を提供し、準備を行う者は「オコトウバン（お講当番）」と呼ばれるが、オコトウバンは班をさらに3つの「組」（3～5戸）に分割し、そのうちの1戸の戸主が担当する。第9図ではその例として表班を事例に取り上げた。年間の当番は各組の代表者が籤引きを行い、12回（4班、各3組）の順が決められる。毎月の講の日程はオコトウバンと住職の間で話し合われ、決定後に無線放送を通じて地区内に案内・周知される。また、オコトウバンは茶菓等にかかる諸経費とオコボウサンへ渡す「お講銭」（5千～1万円程度）、講終了後に地区へ納める600円を負担する。この

第3表 善称寺による寺御講の分担

月	当番となる地区
1	東狐
2	青島
3	道市、上野、青木
4	入善、東五十里、桐山、藤原、舟川新
5	笹原、高島、板屋、五郎八、生地、飛騨
6	北野、金屋、沓掛、三田市、上飯野
7	神子沢、木ノ根
8	芦崎東
9	福島新、袖沢、上飯野新
10	当山
11	福島
12	芦崎西
12	下飯野新、西五十里

（善称寺資料より作成）



第9図 道市地区・表班における村御講の組の範囲（2012年）

注）表班の範囲については、第5図を参照のこと。

（聞き取り調査より作成）

村御講の当番については、隣接する木根地区では老人会（福寿会）、青木地区では婦人会が行うが、道市地区においてはこういった社会組織ではなく各戸が担当することになっている。

現在、村御講は読経、法話（説教）の後に茶を飲んで終了することが多くなったが、かつては共同飲食の習慣があった。食事は各自が米1～2合ほどを持ち寄り、油揚げやダイコン、コンニャク、ゴボウ、煮豆などのおかずとともに米を椀に山盛りにして食していたという。先の寺御講でも炊き出しが行われるが、寺御講が総代や特定の門徒を中心に行われるのに対し、村御講はオコトウバンが取り仕切る。ただし、オコトウバンになった家の戸主が高齢である等の場合は、その子・孫の世代や、後述する同志会などが手伝うことになっていた。

また、道市地区の村御講では、オコトウバンとなった家と同じ班の戸主は参加することが慣例とされ、これは現在でも遵守されている。そのため、聞き取り調査では、村御講を先祖供養などの宗教行事であるとともに、「班あるいは地区の行事」として認識している住民もみられた。現在の村御講の参加者はオコトウバンや同班の戸主、ほかの班の住民を含め毎回10名ほどであり、参加者の多くは高齢の住民である。

#### 4) ゴエイサマ迎え

下新川郡及びその周辺地域では、宗主を描いた巻物（影像）や消息文を巡回させる「ゴエイサマ（御影様）迎え」（ゴエイ渡しともいう）が大谷派、本願寺派ともに現在でも続けられている<sup>6)</sup>。ゴエイサマ迎えは宗派によって巡回の経路と日程が異なり、大谷派では6月下旬に黒部市の愛本橋に到着し、入善町の舟見地区、朝日町を經由して黒東地方を巡る。一方の本願寺派では7月上旬からの1か月間、芦崎地区を皮切りに黒東地方を巡り、下飯野地区に至る（入善町史編さん室編、1990）。ゴエイサマ迎えは道市地区にも立ち寄り、その際には各宗派の門徒が準備を行う。この活動は厳密には講組織の活動ではないが、地区の門徒が組織

的に関わっているため、取り上げることにする。

大谷派のゴエイサマは東本願寺第十六代宗主乗如上人の影像を巡回させ、各地区で勤行を行う。1月に井波の瑞泉寺を出発し、5月に富山市、6月からは滑川市、魚津市、黒部市などを巡る。6月20日頃に黒部市愛本地区に到着し、その後、7月7日頃に木根、道市、目川地区を經由する。

道市地区では門徒総代を中心に3戸ほどが会場設営などを行う。さらに前の木根地区へゴエイサマを迎えに行き、勤行終了後は次の目川地区へ引き渡すが、これも総代らの役割である。ゴエイサマの当番は各組の持ち回りであり、2～3年で交代する。

勤行の会場は各地区とも公民館がほとんどだが、かつては当番となる家で営まれていた。黒東地方において現在住民宅で行っているのは五十里地区のみである。門徒は事前に1千円ほどを布施として包み、さらに勤行参加時に茶代として500円を納める。会場となる道市地区のコミュニティセンターの使用簿（2009年度）によると、当年は7月7日にゴエイサマを迎え、参加者は男性10名、女性15名の計25名であった。ゴエイサマは黒東地方を約20日かけて巡り新浜で見送りとなるが、かつては露店や見世物が出て、大いに賑わった（入善町史編さん室編、1990）。しかし、現在では参加者の減少や高齢化によりかつてほどの賑わいは見られないという。

本願寺派のゴエイサマは本願寺第二十一代宗主明如上人の影像を巡回させる。7月に芦崎地区から黒東地方に入り、入膳、吉原、上野地区を経て道市地区には7月26日に到着する。勤行は公民館がほとんどだが、目川地区では現在でも旧家で営まれている。ゴエイサマを迎えるための準備も大谷派と同様に、当番の門徒（とその配偶者）が主として行う。住民への聞き取り調査によると、以前は神輿で運ばれてくるゴエイサマを門徒や地区の有力者が羽織袴で迎えていたという。現在ゴエイサマは車で運ばれ、コミュニティセンターの玄関にて迎えらる。

門徒は事前に1千円を納め、本願寺派のゴエイ

サマにお参りに行く。また、勤行は宗派の別なく参加でき、本願寺派の門徒が大谷派の勤行へ参加する際には300円を納める習慣がある。同じく大谷派の門徒が本願寺派の勤行へ参加する時もお布施を行う。先述のコミュニティセンター使用簿によると、2009年の本願寺派によるゴエイサマの参加者は男性12名、女性10名の計22名であった。

### Ⅲ-3 小括

本章では手次寺と門徒との関係を踏まえた上で、講組織の仕組みと活動について検討した。講組織については報恩講、寺御講、村御講に加え、ゴエイサマ迎えと門徒との関わりについて述べた。第4表は宗派別に各講組織についてまとめたものである。

講組織の活動のうち、報恩講や寺御講では役員などの特定の門徒が食事の準備や接客などに携わり、道市地区の門徒はこれらの講に積極的に参加していた。一方、村御講では門徒総代などの役員にかかわらず、毎月各戸が主催者として茶菓やお講銭などの準備を行うことになっていた。このように道市地区の門徒は各々の講組織と多様な関係を有し、特に当事者として関わる戸主においては講が生活の中に深く入り込んでいることが確認できる。また、村御講ではオコトウバンと同じ班の戸主の参加が慣例化されており、班や地区の社会

第4表 道市地区において行われる光誓寺及び善称寺の講の日程

	光誓寺(大谷派)	善称寺(本願寺派)
檀家数	23(130)	23(500)
報恩講	10月18日・19日	10月24日・25日
寺御講	毎月13日・28日	毎月16日
村御講	共同で行う	
ゴエイサマ迎え	7月下旬	7月上旬

注)「檀家数」の括弧内は門徒の総数を示す。

(聞き取り調査より作成)

生活においても重要な意味を持っていることが確認された。

## Ⅳ 道市地区における社会組織とその機能

本章では道市地区の社会構造を述べ、講組織との関係やその維持要因を考察する手掛かりとした。具体的には地区に存在する様々な社会組織について述べる。当地区の社会組織は地区を単位とする組織と、班を単位とする組織から構成されている。住民は地区の活動に参加するとともに、居住する班の組織や活動にも積極的に関わっている。以下ではこのような特性を持つ社会組織について検討する。

### Ⅳ-1 班の組織

#### 1) 組織と活動

社会組織としては道市地区の最小単位である班には、班長と会計がそれぞれ1名ずつ存在する。役員を選出方法はそれぞれの班に委ねられているが、各班とも戸ごとの輪番制であり、高齢者や女性の単独世帯でも同様に選ばれる。また、この班長については同じく輪番制である。区長との重複は不可能であり、班長は地区会費の集金のほか、広報や町議会・農協だより等の定期刊行物や回覧板の配布などを担当する。

この班は道市地区の住民にとって最も身近な社会組織であり、日常生活とも深く関わっている。例えば、慶事の際には班内の各戸へ赤飯が配られた。また地区とは別に催される班の新年会や班内積立による「泥落とし(野上がり)」(田植えの後の慰労会)、班対抗のソフトボール大会などが毎年開催される。また、葬儀についても同班の住民がテントの設営、炊き出し、後片付けなどの手伝いを行う。近年ではセレモニーホールでの葬儀が多くなったが、それでも受付や駐車場の誘導は同じ班の住民が行うものとされている。

加えて、前述した村御講でもオコトウバンを回す際には班が基本単位となり、また同じ班で講が営まれる時には班内の戸主の参加が慣例化してい

るなど、班が重要な役割を担っている。班を単位とした活動は年間を通して存在し、住民はそれぞれの行事に参加することで繋がりや纏まりを強固なものにしていると考えられる。

## 2) 同族的結合

他方で、班はこのような地縁的な結びつきに加え、同族的・血縁的な結びつきを基盤に形成されているという側面を持つ。

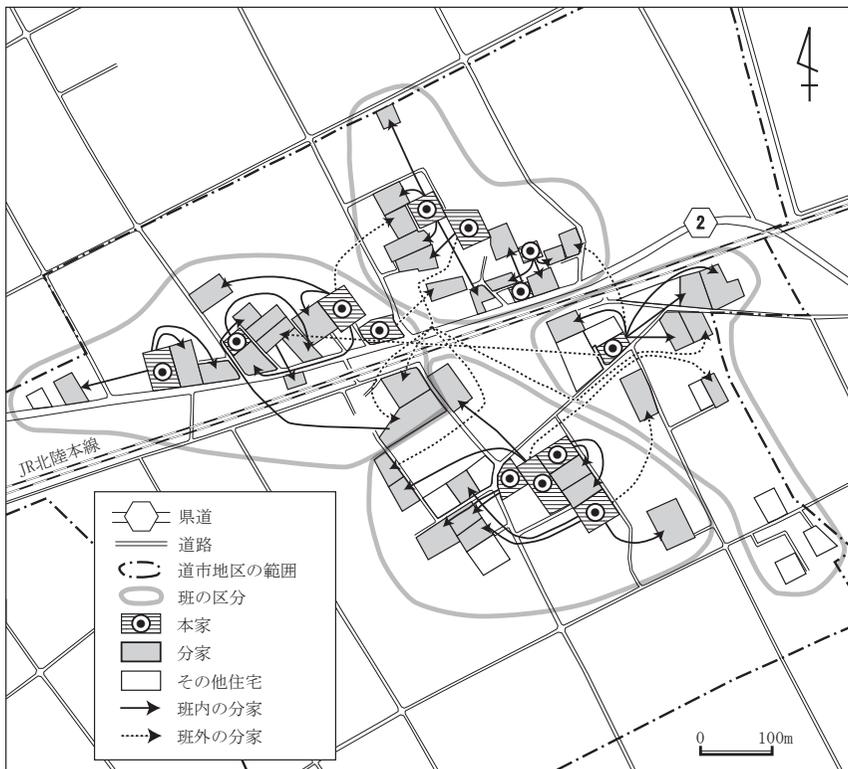
第10図は聞き取り調査をもとに道市地区における本家分家関係を示したものである。これによると、例えば、中班に居住する本家のB家は現在の当主で10代目であるが、分家を5戸輩出しており、そのうち4戸は中班内にある。また、図からはこのB家に限らず、分家の創設が同班内で多く行われており、班での同族的・血縁的な結びつきを確認することができる。ただし、戦時中の兵役免除や家存続を目的に、本来「分家」である者が「本

家」として届け出ることもあったとされ、正確な関係を把握することは困難である。

こういった同族的結合は、法事や葬儀、結婚、出産といった冠婚葬祭を中心とした日常生活においても重要な役割を持つ。先のB家の例をとると、B家当主の子が結婚した際には分家全員が式に出席し、また分家の子の入学や卒業、就職時にはK家から祝儀（主に現金）を欠かさず送る。同族への祝儀は毎年相当額に上るため、B家では冠婚葬祭専用の家計簿を作り対応しているという。かつて本家が新たに分家を創設する際には、本家自らが相応の田と住居を用意した。現在では以前と比べ本家の影響力は弱まってはいるが、それでも結婚や葬儀の時に本家が主導的役割を果たすなど、一定の影響力は保たれている。

## IV-2 地区の社会組織

次に地区を単位とする社会組織である自治会、



第10図 道市地区における本家・分家関係 (2012年)

(聞き取り調査より作成)

及び各種団体の構成と活動、またその特性について述べる。

### 1) 自治会

自治会の組織は、区長（自治会長）、副区長1名、会計・監事2名のほか、班の役員（班長、会計）8名から構成される（第8図）。区長の任期は1年であり、選出は輪番制で中班、表班、西班、東班の順に回り、3月下旬の定期総会で承認される。会計も兼ねる副区長は区長が属する班のはす向かいの班から選ばれる。つまり、副区長が翌々年には区長に選出される仕組みになっている。なお、自治会の年会費は上期1万円、下期8千円である。

自治会の主な活動は、総会資料によると定期総会と年4～6回の常会、各種団体と連携した行事の準備などがある。3月の定期総会では年度事業概要、会計決算、各種組合等の会計、新役員選出案などの報告、また常会は重要行事の案内、重要懸念事項の協議が必要に応じて行われる。

### 2) 各種団体

各種団体には主として青年団、確守会、同志会、若妻会・婦人会、福寿会（老人会）があり、年齢

階梯的性格を持つ。団体の規約は存在せず、入退会などの取り決めもないが、聞き取り調査によると住民は基本的に全員加入し、退会する者はほとんどいないという。また、各団体には団体がいるが、選出方法などはそれぞれの団体に任されている。以下、具体的な活動状況について述べる（第5表）。

#### ①青年団

青年団は学卒後の男性が加入するもので、30歳になると団員は確守会へ移行する。かつては20名ほどの加入があったというが、現在（2012年9月）では半分以下の6名と少なく、毎年減少傾向にある。そのため、確守会への移行年齢を28歳から30歳へ引き上げるなどの対応を行っている。

年間の主な活動は、秋祭り、上原地区のふれあいカーニバル、上原地区大運動会などの手伝い、ソフトボール大会などがあるが、ほぼ毎月何らかの活動を行っている。その中で特に重要な活動が10月の秋祭りである。

秋祭りは地区最大の行事とされ、子供8～10名による手踊りや神輿の巡行が一日かけて催される。神輿は総総代や各班の総代、区長、各種団体の長、また慶事のあった家など10戸近くを回り、祭

第5表 道市地区における年間行事と各種団体の関係（2011年）

月	行事名		年齢階梯別組織					その他の組織		
	地区内 行事	地区外 行事	青年 団	確 守 会	同 志 会	若 妻 会	婦 人 会	福 寿 会	氏 子 組 織	自 治 会 其 他
4	観桜会		○	○	●	○	○			
6	虫祭り								●	
7	敬老会					○	○	●		●
		ふれあいカーニバル				○	○			●
8	盆踊り大会 お盆ソフトボール		○	○	●	○	○			●
9		上原地区大運動会	○	○	○					●
10	秋祭り		○	●	○	○	○	○	○	●
		JAみな穂フェスティバル				○	○			●
1	新年会									●
2	火祭り								●	
3	春祭り								●	

注1) 「●」は主催団体に該当することを意味し、「○」はその補助となることを示す。

注2) 「自治会」は体育協会等を含む。

(平成23年度道位自治会資料および聞き取り調査より作成)

りは深夜にまで及ぶ。かつては2日間に渡って開催されていた。2009年度の地区の総会資料によると、同年の秋祭りは、午後1時頃に神明社を出発し、中班、表班、西班、東班の順に各戸を回り、巡回を終えるのが午前0時半頃の予定とされている。

秋祭りの主催は確守会であるが、実際の運営は青年団が中心となる。具体的には、荷車の移動や提灯持ち、神輿の担ぎ手、音響・照明、太鼓の演奏などのほか、子供たちへの手踊りの指導を行う。この指導は連日夜遅くまで行われ、祭り当日は確守会とともに「天狗の舞」を踊る。

後述する確守会を含め、道市地区における青壮年期の住民は地区の重要行事である秋祭りに中心となって携わり、地区の伝統や文化を吸収することになる。

## ②確守会

確守会は青年団退会後から40歳まで加入するもので、現在の会員数は9名である。この確守会という名称は伝統を守るという考えから40年ほど前に付けられた。同会は先の青年団と同じく会員数が減少しており、移行年齢が35歳から40歳へと引き上げられた。

年間の活動状況は主催する秋祭りのほか、観桜会や盆踊り大会、運動会など主要行事の準備を行う。その他、先の青年団と同様に、毎年地区対抗で実施されるソフトボール大会の練習なども行っており、年間を通して活発な活動が見られる。

これらの活動の中で秋祭りは、手踊りの指導や当日の神輿の準備、後片付けなど、主催団体として重要な役割を担う。青年団とともに行われる踊りの指導は、練習場所となるコミュニティセンターの使用簿によると、2009年は9月28日から開始され、10月11日の祭り当日までの約2週間、1日の休みを除き連日午後6時半から10時半まで行われている。こういった熱心な指導により、道市地区の秋祭りは毎年盛大に催され、多くの住民が参加する。住民への聞き取り調査では、秋祭りは確守会が存在することで支えられているとの理解

があり、行事を運営あるいは維持する上で中心的な役割を担っていることがうかがえる。

## ③同志会

同志会は確守会退会後から63歳まで加入するもので、現在の会員は42名である。後述する福寿会の加入年齢は60歳以上であるため、3年間は両団体に加入することになる。同志会では会長、副会長、会計、監事の役員のほか、各班から連絡員2名が選出される。この同志会と福寿会、婦人会には年会費の制度があり、同志会の会員は年間5千円を納める。

主な活動は、観桜会、盆踊り大会などがあり、そのうち、観桜会と盆踊り大会は主催団体として準備や後片付けを行う。観桜会は毎年コミュニティセンターで行われ、地区住民の約半数にあたる100名ほどが参加する地区の主要な余暇行事である。また、盆踊り大会は神明社を会場に催されるもので、2009年の記録では60名ほどが参加している。

これらの活動に加えて、村御講の手伝いも同志会の役割とされる。同志会では上記の主要な行事を運営するとともに村御講についても関わっており、確守会と同様、地区の伝統や文化を継承する上での役割は大きい。

## ④若妻会・婦人会

女性は結婚により道市地区に転入してから35歳まで若妻会に加入する。その後、60歳までは婦人会に入り、60歳以上になると男女共に福寿会へ移行する。婦人会は戦前期に設立された愛国婦人会を嚆矢とし、1950年頃に旧村単位の地区婦人会が結成されたが、道市地区のような小字の婦人会はその支部として位置づけられている（入善町史編さん室編、1990）。現在の若妻会の会員は5～6名、婦人会は40名ほどである。

年間の活動は、若妻会と婦人会が共同で行うことが多い。主な活動としては、観桜会での豚汁の準備や盆踊り大会、運動会の参加などがあるが、特に特筆に値するのが各種行事での踊りの披露であ

る。聞き取り調査によると、地区の敬老会や地区外で催される行事で踊りを披露するという。また、秋祭りでは他の行事とは別の踊り（おわら、入善音頭）を披露することになっており、若妻会・婦人会も地区の行事において補佐的な役割を果たしている。

#### ⑤福寿会

福寿会は60歳以上の男女が加入するものである。年会費は1千円、現会員は105名であり、団体の中で最大を誇る。福寿会では会長、副会長（2名）、幹事、監事の役員のほか、各班から理事2名が選出される。

年間の主な活動は、秋祭りでの高張り提灯持ち、コミュニティセンターや近隣の上原公園などの清掃、毎月開催の元気わくわく教室（健康、福祉関係）、物故者法要などがある。その他、交通安全指導、防犯パトロールなどの取り組みも行っており、同会は道市地区やその周辺地域を補佐する役割を担っている。福寿会では定期総会や常会などのほか、新年会や年2回の旅行なども開かれ、会としての活動は活発といえる。

また、地区内の葬儀の際には福寿会会長が弔辞を行うのが通例となっており、毎年の物故者法要を含め、福寿会は住民の追善供養を行う団体としての側面も有している。

### IV-3 社会組織を通じた住民意識の向上

本章では班、及び地区を単位とする社会組織について検討した。そのうち、班は日常生活での関わりに加え、班主催の行事を通して班としての纏まりを強固なものにしていた。また、班は本家分家関係を基盤に形成され、冠婚葬祭を中心とした同族・血縁間の諸行事においても顕著な結びつきを示していた。こういった班での生活により、住民は同族意識や「家」の継承を自覚していくものと考えられる。

一方、地区を単位とした社会組織には自治会と各種団体が存在し、その中で各種団体では年齢を重ねるごとに地区の様々な行事の運営、維持に携

わっている。上記のように、青壮年期に加入する青年団と確守会では地区最大の行事である秋祭りの運営、同志会では観桜会や盆踊り大会などの余暇活動のほか、村御講の手伝いにあたっていた。そして福寿会では地区周辺の清掃や物故者法要を主催していた。また、福寿会のメンバーの多くは戸主として報恩講や寺御講、村御講の活動の中心を担っており、地区の行事とともに宗教行事の参加、運営面でも大きな役割を果たしている。

このように各団体では年齢ごとに多様な行事に関わっており、こういった活動が地区の伝統や文化を継承、維持することの重要性を自然と吸収し、道市地区の住民としての自覚を養うことに寄与していると考えられる。

また、道市地区では地区自体の戸数が比較的小数のため、自治会・各種団体や先の氏子集団の役員となる頻度が高い。聞き取り調査によると、年齢を増すごとに4～5年に一度はいずれかの役員に選出されるという。新たに役員になった者は経験者から組織の運営や調整などを伝授され、役員としての職責を果たしていくのである。このような役員経験は班員及び団体員としての行事への参加とともに、組織や地区に対する当事者性、帰属意識を高める上で重要な役割を担っていると考えられる。

以上のように現在まで続く道市地区の社会構造の背景には、地区の地理的な特徴が関係していると推察される。I-3で述べたように、道市地区は市街地の入膳地区に近接しているにもかかわらず、現在まで当地区への転入は2戸と極めて少ない。こういった特徴は、地区としての纏まりや文化の継承、維持を進める上で大きな意味を持っていると考えられる。住民によると上記の年間行事のほかに、毎年3月の「シエザライ」（用水の掃除・整備）や年4回の宮掃除などでは現在でも全戸が参加しており、この例からも地区としての強固な纏まりを看取することができる。

## V 道市地区における講組織の構造と維持要因

終章では講組織の構造と維持要因について、前章で検討した地区の社会構造との関係性から考察を行う。ここでは講組織の中で地区を中心に活動が行われている村御講に焦点を絞って、分析を進める。

道市地区における村御講は、先述した班の機能や特性と密接に結びついている。当地区の村御講の当番は各戸が行うが、このオコトウバンは班をさらに分割した「組」の中の一戸が担当することになっていた。また、オコトウバンと同じ班の戸主の慣例となっており、ここからは班と深く結びつく形で村御講が営まれていることが確認できる。

加えて、講は従来、親鸞を追慕し信者同士の信仰を確かめ合う場であったが、近世の寺檀制度の影響などによって先祖供養の場としての意味も持つようになった。住民への聞き取り調査によると、村御講の参加理由として、この先祖供養を挙げる者も存在した。住民は先祖供養を通して同族間の紐帯の維持・強化を行うが、このような講としての機能は、地縁の関係に加えて同族的・血縁的な関係を有していた班の特性と結びつくといえ、この点からも社会構造との関係を指摘することができる。

以上のような社会構造との関係を踏まえ、次に村御講が現在まで維持されてきた要因について検討する。

前章で述べたように、道市地区では年齢ごとに行事への関与・運営や役員経験をする機会がある。また新住民の僅少な流入による強固な纏まりも相まって、地区や班の行事は今日まで継承して行われてきた。こういった当地区の特性は、地区の社会構造と密接に結びつく村御講においても、先の年間行事と同様に地区の文化や伝統の一つとして重視されていると推察される。この点は、住民の中に村御講を真宗の行事であるとともに、「班や地区の行事」として認識している者が少なくないことから理解できる。つまり、オコトウバンと

して村御講を担う戸主たちは、長年の地区の社会生活の中で蓄積された住民としての意識や自覚を基に、現在まで自然と村御講を主催あるいは参加していると捉えることができるだろう。

他方で、大谷派と本願寺派の両派が存在するものの、当地区のほとんどの住民が真宗門徒であることも村御講が維持される上で重要である。特にこの点は、道市地区に限らず、真宗の篤信地帯としての歴史を持つ富山県、あるいは北陸地方に共通する要素として考えることができる。また、上記のように、村御講が有する先祖供養としての機能も維持要因として指摘することが可能である。

先行研究では、村落における信仰集団の構造やその維持に村落の社会構造が深く関係していることが指摘されてきた。本研究で対象とした道市地区においても、村御講と班との構造的な関係性、地区及び班を単位とする社会組織の活動を通した住民意識が確認できた。加えて、真宗門徒が多数を占め、かつ新住民が僅少であるといった道市地区の地域性が重層的に結びつく中で、現在に至るまで講組織が維持されていることが明示できる。当地区を含む北陸地方では真宗の篤信地帯という特性から、講組織の維持に対して、信仰や宗教的側面に関心が向けられることが少なくなかったが、こういった地域の社会構造との関係についても深く検討することが必要であると考えられる。

ただ、近年では若い世代の減少や地区からの流出が目立ってきているという。この傾向は青年団や確守会の会員数にも顕著に表れており、これまで大きな変動がなかった道市地区においても変化の兆候が見られる。地区では各団体の移行年齢を上げるなどの対策を講じているが、若年・青壮年代が地区の主要行事を中心に担っているだけに担い手の問題は深刻である。また、この点は上記したように他の世代・団体の活動とも不可分の関係にあるため、講の形態や運営の面において何らかの影響が生じるものと思われる。道市地区の今後にも注視を促したい。

現地調査に際して、吉島雄一氏（黒部川扇状地研究所）、道市地区区長の松島幸夫氏、吉島貞子氏、広清百合子氏、福島善四郎氏をはじめとする道市地区の住民の方々、光誓寺住職の西山氏、善称寺副住職の萩原氏には多大なるご協力を賜りました。末筆ながら、記して御礼申し上げます。

本論文の執筆は、本文を卯田及び益田、図表を細谷及び金、全体の調整を久保及び松井が行った。

#### [注]

- 1) 消息は大谷派では「御文」、本願寺派では「御文章」と呼ばれる。
- 2) 寺が会場となったり、一村落の範囲を越えて行われたりする村御講もあり、会場や地域が組織形態を分類する際の絶対的条件とは言えない。そこで、内藤は集団の基礎が寺の門徒にあるか、村落の住民にあるかを分類の基本的条件としている（内藤、1978）。
- 3) 火祭りは、かつて地区で度々火事が起こった際に、その火伏・防火を祈願するために始まったものである。この祭りは道市地区のみで行われている。
- 4) 所属する「惣」「講」の捻出し得る寄付金が300文を超えれば寺院、下回るならば道場となった。
- 5) 村御講は、戸主の都合により、年に数回ほどコミュニティセンターで行われることがある。
- 6) この映像や消息文などを巡回させて講を結ぶ行事は、当地方の「ゴエイサマ迎え」のほか、石川県羽咋郡、滋賀県東浅井郡、長野県北部などでもみられる（高谷、1981）

#### [文 献]

- 青雲乗芳（1974）：『真宗王国－富山の仏教－』巧玄社。
- 内田秀雄（1959）：真宗の発展－仏教地理学研究。人文地理，10，330-344。
- 内田秀雄（1966）：近江に於ける村落の宗教性－湖南の寺院を中心として－。大阪学芸大学紀要。A，人文科学，15，154-166。
- 内田秀雄（1971）：『日本の宗教的風土と国土観』大明堂。
- 宇治 伸（1996）：『宗教的「講」と村落社会構造－越中真宗門徒講を中心として－』令文社。
- 奥田淳爾（2006）：黒東地方における真宗の講について。黒部川扇状地，32，10-23。
- 笠原一男（1942）：『真宗教團展開史』畝傍書房。
- 蒲池勢至（1993）：『真宗と民俗信仰』吉川弘文館。
- 蒲池勢至（2001）：『真宗民俗の再発見』法蔵館。
- 桜井徳太郎（1962）：『講集団成立過程の研究』吉川弘文館。
- 善称寺仏教婦人会（2010）：『善称寺仏教婦人会五十年の歩み』善称寺仏教婦人会。
- 竹田聰洲（1957）：『祖先崇拜』平楽寺書店。
- 高谷純夫（1981）：浄土真宗における巡回講。まつり，38，81-92。
- 千葉乗隆（1961）：真宗門徒の組織－特に惣・講について－。仏教史学，9-2，1-17。
- 土井了宗・金龍教英編（1991）：『目でみる越中真宗史』桂書房。
- 富山別院開創百周年記念出版『越中念仏者の歩み』編集委員会編（1984）：『越中念仏者の歩み－講の成立と変遷－』永田文昌堂。
- 富山県下新川郡役所編（1909）：『下新川郡史稿 上巻』下新川郡。
- 内藤莞爾（1978）：『日本の宗教と社会』御茶の水書房。
- 中川 正（1983）：集落の性格形成における宗教の意義－霞ヶ浦東岸における二つの集落－。人文地理，35，97-115。
- 中條暁仁（2001）：過疎山村における講集団の変化と村落社会－島根県仁多町阿井地区の事例－。地理科学，56，211-231。
- 西山郷史（1998）：『蓮如と真宗行事』木耳社。
- 入善町誌編纂委員会編（1967）：『入善町誌』入善町。
- 入善町史編さん室編（1990）：『入善町史 通史編』入善町。

- 平井松午 (1980) : 丹波高地東部における宮座と村落構造 - 京都府京北町矢代地区を例として - . 人文地理, **32**, 407-427.
- 藤村健一 (2004) : 越前における真宗と村落社会 - 道場の変遷を中心に - . 歴史地理学, **46**, 1-14.
- 松崎憲三 (1985) : 『巡りのフォークロア』 名著出版.
- 本林靖久 (1989) : 真宗門徒の宗教生活における複合的性格 - 北陸門徒の講組織と民俗性を通して - . 京都民俗, **7**, 21-41.
- 森岡清美 (1978) : 『真宗教団における家の構造』 御茶の水書房.
- 山口弥一郎 (1964) : 『集落の構成と機能 - 集落地理学の基礎的研究 -』 文化書房博文社.